

藤ふじ

井い

神じん

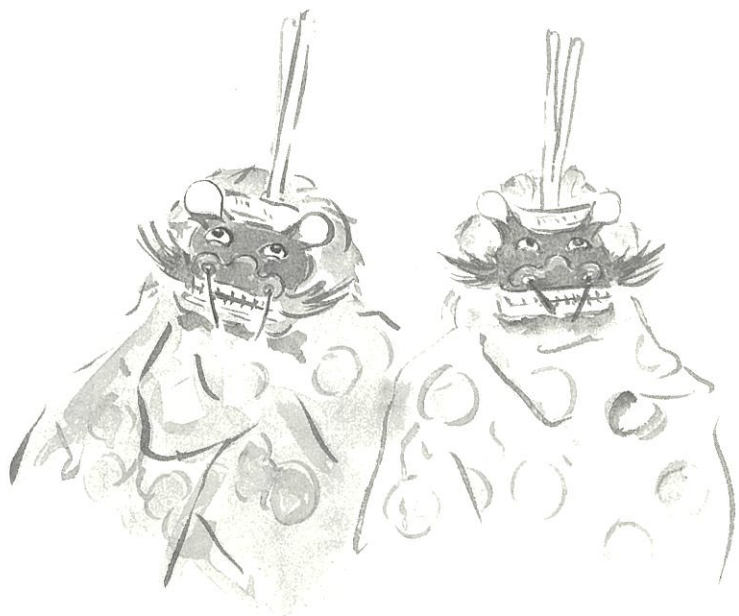
社じゃ

むかし、横根村は、衣ヶ浦の入江に面した村でした。

村の中ほどに、大きな藤の木があつて、そのそばに、こんこんと清水のわき出ている泉がありました。それを人々は「藤井」と呼んでおり、「知多の三泉」の一つといわれていました。

八百年ほどむかし、源頼朝が、亡くなつた父義朝のお墓参りのために野間を訪れる旅の途中にここを通り、藤の木の下で一休みしました。ちょうど藤の花がきれいに咲いていました。

「美しいところだ。ここに藤井大明神をお祭りしたらどうじゃ。」
という頼朝のことばを、村人たちは喜んで受け入れました。みんなで力を合わせ、お金を出しあつて社を造り、「藤井神社」と名づけました。やがて、藤井神社のお祭りには、「だんつく」と呼ばれる獅子舞いが奉納されるようになりました。



長い時が過ぎて、境川から流れ出た土や砂が、しだいに衣ヶ浦の北部の海をうめていきました。やがて、横根村からは、入江がなくなりました。漁や塩づくりでくらしをたてていた人たちは、生活ができにくくなってしまいました。

「おらあ漁師だ。これからも魚とりを続けてやあなあ。」

「おれもそうだ。ええ考えはないかなあ。」
「どこか海のあるところに、越していくか。」
などと漁師たちは相談して、はるか南の藤江村の海岸沿いに、新しい村をつくることにしました。

「氏神さんは、やっぱり藤井神社にしよまいか。」

「そうだ、そうだ。お祭りもだんつくがええ。」

藤江の村にも、横根村から移り住んだ人たちによつて藤井神社が造られました。お祭りには、横根村から祭り道具やお面を借りてきて、だんつくおどりをしました。

また、時が流れました。藤江の藤井神社ではだんつくが続けられていましたが、横根の藤井神社のお祭りでは、だんつくにかわつて、飾り馬や山車ひきが行われるようになりました。

「来た来た、飾り馬がやつてきたぞ。」

「おい、おい。大脇や落合村からの馬がいるぞ。」

「そうだよ。藤井神社の氏子には、大府村や北尾村、追分村も入っているんだぞ。」

午前中には、横根村のほか、氏子であるまわりの村から奉納された馬のかけくらべをします。

「よいしょ、よいしょ。もつと力を出して。」

「そうおれ、そうおれ、もつと、もつと引け、引け。」

午後になると、横根村の北・中・南組の山車が引き出されます。

「北尾の山車も出ているな。」

「なんでも、近江の長浜からゆずり受けたもんだげな。」

と、北尾村の山車も境内けいだいにくり出します。
神前に並べられた山車の前に舞台ぶたいがつ
くられます。

おうさい、おうさい

喜びありや

わが思うこのところより

外へはやらじと思う

といううたいと笛やたいこのはやしに合
わせて、剣けん先さきぼうしにはかま姿の子ども
が、「三番そう」をおどります。



横根地区に伝わる話です。
横根町の藤井神社の境内に、泉の跡があります。「三番そう」の舞いは、十月第三日曜日に行
われ、市の無形文化財に指定されています。藤江村は、今の東浦町藤江です。
知多の三泉とは、南知多町篠島の「帝の井」と東浦町生路の「生路井」と、それに「藤井」で
す。
源義朝のお墓は、知多郡美浜町野間にあります。